

## 歌舞伎役者三世澤村田之助と 生人形師松本喜三郎

川村 一郎

わが国で最初に義足らしい義足をつけたのは徳川時代末期から明治維新にかけて歌舞伎界で活躍した立女形（たておやま）三世澤村田之助（1845-1878）である

日本製の義手足が外観に重きを置き、機能を重視しない伝統は恐らく田之助時代から始まり、日清・日露戦争で戦傷による四肢切断者に天皇又は皇后が支給したという、いわゆる「恩賜の義肢」は使いものにならず廃兵達（当時四肢切断の戦傷軍人はこう呼ばれていた）は恩賜の義肢を神棚にあげて日夜礼拝したと伝えられている。（写真2 第二次世界大戦のもの）  
ところでそれを着けて歩くことができなかったとはいえ、日本で始めて義足を作った活人形師松本喜三郎とはどういう人であったのであろうか。

活人形（生人形ともいう）とは、人によく似せて作られた等身大の人形であり、庶民の見世物として幕末に勃興して、一躍民衆娯楽界の寵児となった。

と言われている。彼は19才の頃より脱疽（今で言う末梢循環障害）による壊死にかかり1867年横浜で開業していた、アメリカ人医師ヘッパーン（ヘボン式ローマ字を考えた人）に切断を受けた。（写真1）

ヘッパーンはアメリカセルホース社に田之助の義足を注文したが、それが完成して到着するまで待たないので、活人形師松本喜三郎（1825-1891）に義足を作らせた。喜三郎の義足は外観は完全なものであったが適合が悪く、使いものにならなかったという。喜三郎はそれを恥じて代金を受け取らなかった。そのうちアメリカに注文したセルフオース社製の義

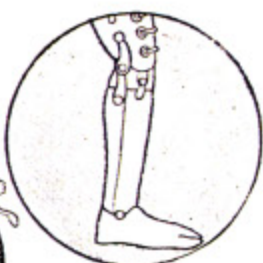
足が到着し、田之助はそれを装着して再び舞台に立ち名声を取り戻した。

このセルフオース社製の義足代金は当時200両であったそうで、今の価格になおすと、数100万円に相当するであろう。

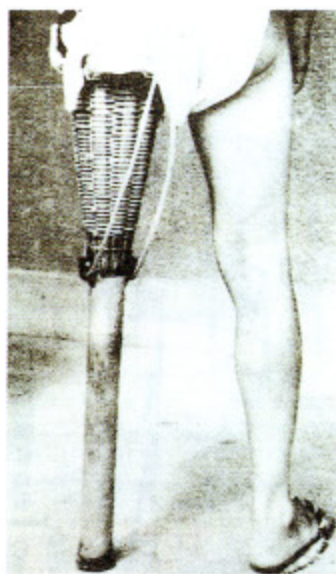
(5)



(写真1)



三代目 田之助 (写真1)  
「50年の歩み」鈴木邦雄より (3)



竹の義足  
「義肢装具とリハビリ  
テーションの思想」  
武智秀夫 より (5)



(写真2)



松本喜三郎は文政8年(1825)、熊本県井手口町に生まれた。若い時から趣味の木彫をもって家計を助け、近くの地蔵堂の夏祭に多くの作り物の中に人形を出すようになった。喜三郎は安政元年(1854)、大阪で生人形を披露した。それをみた人々は「男女とも活ける人に向かうが如し」と驚いたという。(6)(7)(写真3)



(写真3)

彼は明治5年(1872)3月、東京大学の前身東校・松本順から人体模型製作の依頼を受けた。喜三郎への下命方は、松本順から文部省に具申され、そこから東京府へ下命通牒が発せられた。

#### 人工体製造方申付候事

但シ田口成庵指揮ニ随イ相勤可申事

壬申三月

東校

喜三郎は、人体模型製作の依頼を受けてから、その製作に1年間専心した。製作にあたっては、田口成庵の解剖にしたがって人体組織の指導を受けている。大学東校は明治3年、特志解剖が許され、刑死体、あるいは獄中で病死して引取り人のないものを、医学研究のために解剖することが許可された。

喜三郎は、人体模型の見取り図を頭に刻み、田口成庵(田口和美、東京大学の初代解剖学教授)の解剖について実地見学して模型の製作にかかった。



(写真4)

内臓は喜三郎特有の凝り性から、臓器各部を嵌込みの細工として、それを原色どおりに着彩し、皮膚は得意の練胡粉のバラで、人体そのままの肌色を出した。これを一覧した東校の松本順は、人体模型の見事な出来栄えに対して「百物天真創業工」という賛辞を贈った。それ以後、これは喜三郎の最も誇りとするところであったのであろう。さらに喜三郎は明治6年(1873)、政府の勸奨によって「骨格連環」と「造り花」をウィーン万国博覧会に出品した。明治9年(1876)、出品に対する礼状が時の大蔵卿・大隈重信より付与された。(6) 下肢を切断した澤村田之助の義足が必要となり、その製作者として松本喜三郎の名が第一にあがったことは、こうした背景から当然であったといえる。喜三郎は58才で熊本に帰り、弟子に教え、明治24年(1891)4月30日67才でその生涯を閉じた。唯一の弟子、江島栄次郎製作の作品は写真の通りである。(8) (写真4・5)

#### <参考文献>

- (1)片山 良亮「義肢の沿革と担い手」  
義肢 第1巻第1号, P.2-10, 1939.11
- (2)木下 直之「特集江戸のエロス 見世物小屋のアイドル」  
月刊 太陽 (平凡社), P.50-55, 1995年2月号
- (3)鈴木 邦雄「50年の歩み」  
日本義手足製造株式会社, 1967
- (4)武智 秀夫「手足の不自由な人はどう歩んできたか」  
医歯薬出版株式会社, 1981.9
- (5)武智 秀夫「義肢装具とリハビリテーションの思想」  
創造出版, 1995
- (6)坪井 良子「義足の歌舞伎俳優三世澤村田之助」  
臨床リハビリテーションVol.2 No.4, P.314-315, 1993.4
- (7)坪井 良子「黎明期の義足と生人形師」  
臨床リハビリテーションVol.2 No.5, P.404-405, 1993.5
- (8)土居 郁雄「松本喜三郎と「活人形」の世界」  
毎日グラフ (毎日新聞社), P.80-85, 1994年5月15日号



(写真5)